

活動報告書

報告者氏名：和田 博

所属：沖縄県立森川特別支援学校

記録日：2014年 2月21日

【対象児（群）の情報】

- 学年：高等部2年 男子 A
- 障害名：先天性非福山型筋ジストロフィーによる両上肢・下肢機能全廃、呼吸機能障害
- 障害と困難の内容
 - ・ 生後まもなく気管切開し人工呼吸器を装着し、全介助が必要な生徒である。
 - ・ 口から水分や食事を摂ることができず、鼻腔からの経管栄養を行っている。
 - ・ 左上肢、両下肢はほとんど動かすことができない。
 - ・ 右肘を軽く固定すると右前腕、右手を動かすことができる。
 - ・ 発語はあるが明瞭ではなく聞き取ることが難しい。
 - ・ MRSA(耐性黄色ブドウ球菌)に感染しており集団への参加が規制されている

【活動目的】

- 当初のねらい
 - ・ 道具、機器を活用すると自分自身できることの幅が広がることを知らせる。
 - ・ 繋がる伝わる喜びを数多く経験させることでコミュニケーションスキルを向上させ、自己肯定感を高める。
- 実施期間 平成24年9月より
- 実施者 野原美穂 城間智春 浦崎美香代 和田 博
- 実施者と対象児の関係 学級担任、副担任、授業担当者

【活動内容と対象生徒の変化】

- 対象生徒の事前の状況
 - ・ 職員に手の甲を支えてもらい、職員が対象生徒の手の力の入れ加減方向を感じ取り文字を表現することができる。これが彼にとって唯一のコミュニケーションの手段となっている。文字を表現させるには職員の慣れとスキルが要求され誰でもできるという状況ではない。
 - ・ 集団への参加が規制されているために入学式や始業式の行事等に参加することができない。



文字を書いている様子

○ 活動の具体的内容

①自分の気持ちの表出

使用アプリ：トーキングエイド for iPad テキスト入力版

- ・ スイッチ操作で自分の思いを人に伝えていく活動。



②参加手段、活動スタイルの拡大

使用アプリ：Skype FaceTime

- ・ 直接参加できない行事や取り組み等に web を経由して参加していく活動
- ・ お母さんとのおしゃべり



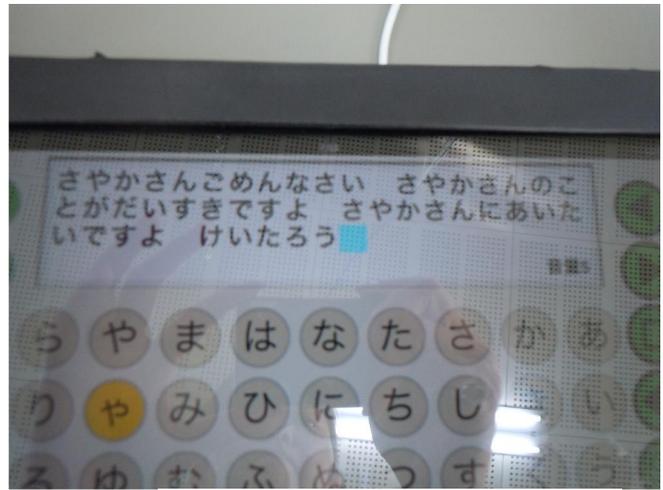
○ 対象生徒の事後の変化

①の取り組みについて

- ・ 職員と一緒に文字を書いていくコミュニケーションの方法では限られた人としかコミュニケーションが取れないことを考えさせた。そして誰にでも自分の考えや思いを伝えるにはトーキングエイドのような機器を活用していくことが有効であること、機器を活用していくことで楽しみがより増えることを説明し意識させながら活動を進めている。
- ・ トーキングエイド for iPad への文字の入力は当初ジェリーペンスイッチとワイヤレススイッチボックスを活用していた。しかし、文字選択のタイミングとスイッチ操作のタイミングが遅れることが多く見られた。スキャン速度を遅くすることで調整を試みたが生徒の方からスキャン速度が遅いとイライラする旨の発言があり、スイッチ操作が速くできるようスイッチの選択を考えポイントタッチスイッチでの操作を試みた。スイッチ変更後押している感覚がないと話していたが自分のスイッチ操作と iPad の反応を理解し、タイミングの遅れを解消することができた。
- ・ 自分が伝えたいことを短い文章で考え、自らの意思で確実に入力できるようになってきた。さらに入力を失敗した場合でもクリア・消去もスムーズに行えるようになった。



トーキングエイド取り組みの様子



実際に生徒が入力した文章

②の取り組みについて

- ・ これまでも学校としての行事でその場に直接参加することができない児童生徒に対してコンピュータを活用して web による中継には取り組んできた。場所が固定されている行事だと取り組みを進めていくことができたが避難訓練や校外での学習では取り組みを進めていくことが難しかった。iPad を活用することで避難訓練では、友達が避難している様子や駐車場での消火活動の様子を見ることができ避難訓練に参加することができ喜んでいった。



避難訓練消火活動の様子

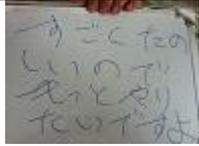
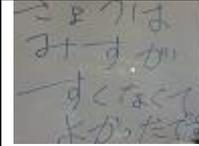
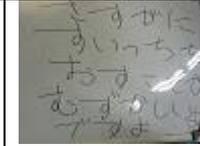
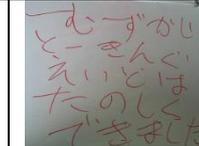
【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

- ① これまでは限られた人との筆談で自分の意志を表出していたが、iPadを活用したことによって初めて会う人との挨拶等も考えるようになり人とのつながりを考えるようになった。
- ② これまでの筆談では文章が長くなることもあったが、トーキングエイドの活用で短い文で伝わりやすい表現を考えるようになった。
- ③ iPadを活用したことで操作のしやすさや見えやすさ等を生徒自身が考え職員に指示ができるようになった。

○気づきに関するエビデンス

- ① 授業後に感想を聞いてみると前向きなものが多く機器の活用に積極的な面が見られた。

				
すごくてのしいのでもっとやりたいです。	まだできないのでできるようにになりたいです。	きょうはみすがすくなくてよかったです	さすがにすいっちをおすことがむずかしいですよ	むずかしいとーきんぐえいどはたのしくできましたよ

- ② 対象生徒の事後の変化で示した写真のように短い文章を入力するようになっている。
- ③ 機器のセッティングの段階から自分自身の見えやすさや押しやすさを考えて不都合な点を職員に指摘するようになっている。

【今後の見通し】

職員に介助してもらいながら文字で表現するときには自分の思いをすらすらと書くことができる。トーキングエイドではまだ入力の方に集中してしまい自分の思いを表現するまでにはもう少し時間が必要となっている。ただ、自分自身が伝えたい「だいすきです」、「あいたいです」「ごめんなさい」などを伝えたいときにはトーキングエイドを活用する傾向がみられる。生徒自身が本当に伝えたい自分の思いを直接相手に伝えられることのすばらしさをもっと体験できるような取り組みを継続してしていかなければならない。そのためポイントタッチスイッチの位置やiPadの置き方等も改善できる要素があるのかを含めて操作にストレスを感じないような取り組みとメールの機能を活用してコミュニケーションの方法を拓ける取り組みを進めていきたい。iPadの活用で生徒自身が機器を活用することで自信の活動の幅が拓がることに気づき色々な機器に興味を持ち職員の機器の話も真剣に聞くようになっている。コンピュータの活用も含めて生徒の活動の幅を拓ける取り組みを進めていかなければならない。

学校での取り組み状況を病棟スタッフが見学にも来てくれているので学校だけでの取り組みだけではなく病棟での取り組みをどのように進めていくか病棟スタッフと調整をしていき、学校職員・保護者・病棟スタッフと取り組みの輪を拓げ卒業後の生活に繋げていく取り組みにしていきたいと考えている。